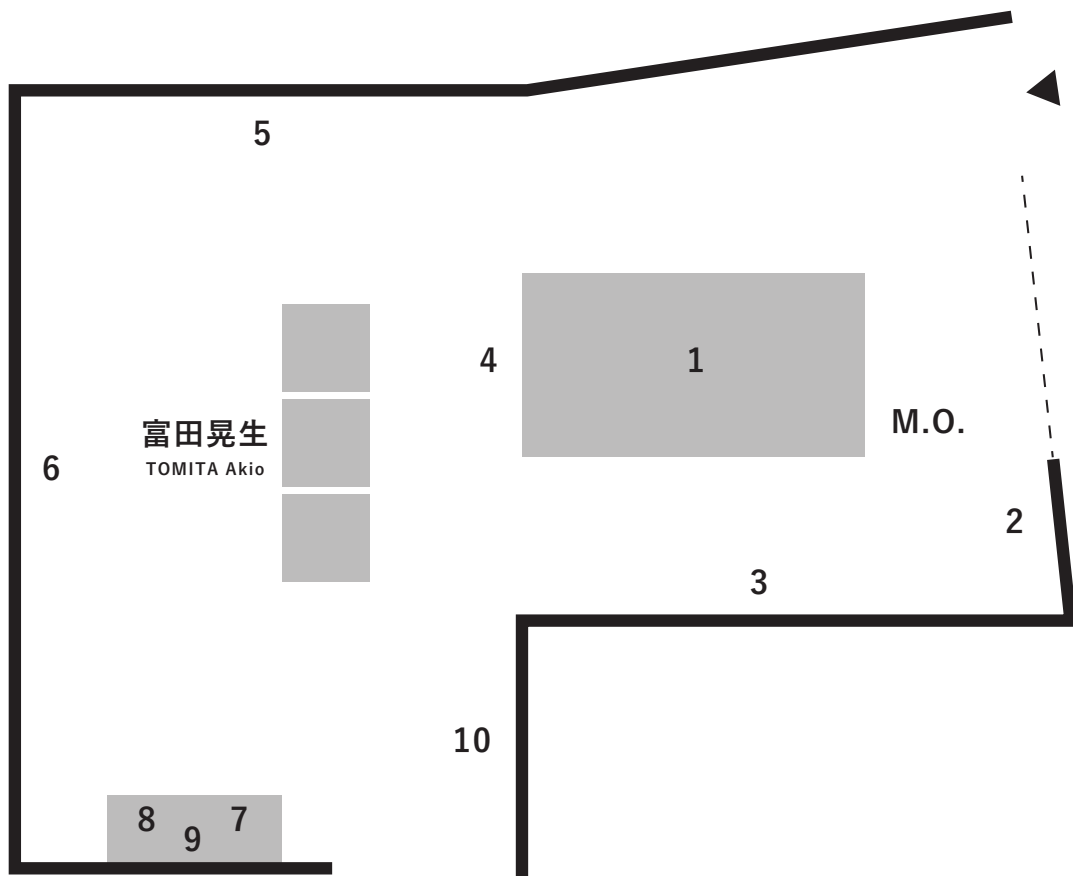




作品タイトル		制作年	素材・技法・備考
M.O.（えむ・おー）			
1	M.O. 資料写真 #1	2010年頃-	画像提供：ワークセンターとよなか
2	M.O. 資料写真 #2	2008年	画像提供：ワークセンターとよなか
3	M.O. 制作映像 #1	不明	1時間00分20秒 備考：「アリさんマークの引越社」
	M.O. 制作映像 #2	不明	1時間02分38秒 備考：「EPSON」
	M.O. 制作映像 #3	不明	45分34秒 備考：「JJ 1997 109」
			撮影：ワークセンターとよなか
4	M.O. 資料映像	2025年	10分29秒 出演：M.O.、中垣匠人、東谷圭真 撮影：寺岡海（art space co-jin） 制作：きょうと障害者文化芸術推進機構
富田晃生（とみた・あきお）			
5	《 TOYOTA（Commercialシリーズ） 》	2008年頃	セロハンテープ、化粧箱
6	《 Commercial 》	2008年頃~2025年	セロハンテープ、化粧箱
7	《 終/ からから NHK（Commercialシリーズ） 》	2024年	セロハンテープ、化粧箱
8	《 CHANCE（Commercialシリーズ） 》	2024年	セロハンテープ、化粧箱
9	《 FNN 終/（Commercialシリーズ） 》	2024年	セロハンテープ、化粧箱
10	富田晃生 資料映像	2025年	4分46秒 出演：富田晃生 協力：NPO法人 障害者芸術推進研究機構（天才アートKYOTO） 撮影・編集：寺岡海（art space co-jin）

富田晃生（とみた・あきお）

1989 年生まれ・京都府在住

富田は企業やテレビ番組などのロゴを、化粧箱を切り抜いて再現し、セロハンテープで台紙に巻きつけたものを長年に渡り制作している。その数は現在に至るまでで 1,000 点以上にものぼる。

3 歳頃からテレビで見た企業のロゴに興味をもち、5 歳になるとスケッチブックにクーピーを使ってロゴばかりを描いていた。14 歳頃にはダンボールや菓子箱などの化粧箱を切り取ったコラージュに発展し、20 歳からは天才アート KYOTO に通い本格的に制作・発表を始める。

モチーフは、電気機器メーカー、クレジットカード会社などの企業ロゴ、車のエンブレム、ビデオゲームの画面、ニュースやアニメのタイトルロゴのほか、番組の最後に必ず出てくる提供の文字など。何度も繰り返し見ていた、幼少期に録画したビデオの記憶を元に制作しているようだが、近作には新しいロゴもあり、情報のアップデートが見られる。

また、以前はロゴと素材の色をリンクさせるこだわりがあったが、現在は実際のロゴの色味に捉われずに独自の色彩で制作している。

映像の記憶から抽出したロゴマークに、自立するほど分厚くセロハンテープを巻きつける。完成後は手に持ちながらじっくりと出来栄を観察しているため、その感触も作品の重要な要素なのかもしれない。またテープを重ねることで生まれる表面的な光沢からは、テレビ画面の質感も想像される。

富田の手に持ちたいという欲求を体験できるように、会場内には触れる作品も一部展示した。



《THE END（Commercial シリーズ）》2015 年
セロハンテープ、厚紙、段ボール



《Levis（Commercial シリーズ）》2008 年
セロハンテープ、厚紙、段ボール

M.O.（えむ・おー）

1979 年生まれ・大阪府在住

M.O. は板の上に黒い粘土で形作られた半立体の文字を制作している。文字が完成すると、職員に見せる。完成した作品を指差し、文字を囁くように読み上げ、机の周りを歩き回りながら鑑賞した後、あっという間に粘土の塊に戻してしまう。作品は形として残されず、写真や映像などの記録でしか確認することができない。

2008 年から通い始めたワークセンターとよなかにて、粘土に触れるようになり、テレビ番組のアイキャッチや雑誌で見たキャッチコピーなどを精巧に再現するようになった。出来上がった作品は、彼の意思で残されることはないが、施設職員の撮影により Instagram 上で公開している。

制作の際は文頭ではなく途中の文字から作り、最終的に並び替えている。意味として作るというより形として作っているようだ。

粘土の色や手触りにはこだわりがあり、以前職員が代替品を混ぜたものを渡したところ、制作のペースが落ちたことがあった。現在使用している粘土は、ワークセンターの商品の一部に使われることもあるが、ほとんど M.O. 専用として保管されている。

制作時間の合間には iPad で「サンマリオ伸長法」「Mr. ハビット」というキーワードで画像検索をかけている。表示された関連画像から制作のネタを探しているようである。

粘土の形を残さないことについて、本人の口からの説明はないが、制作を傍で見守る職員は、形を残すことが目的ではないのだろうと語る。モチーフは過去に触れたことのある雑誌やテレビ番組などが多く、文字に伴う自身の記憶を整理したり、思い出を反芻しているのかもしれない。



M.O. | 2020 年頃 | 粘土



M.O. | 2019 年頃 | 粘土